腹痛少女と犬

遊者☆獅夢弐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
腹痛少女と犬

【Ｎコード】
Ｎ４５６２ＢＡ

【作者名】
遊者☆獅夢弐

【あらすじ】
ある秘密をもった少女と神の使いの犬が主人公の学園ファンタジー？の物語です。

『第一話　ーハジマリー』

ここはどこだろうか…

ここは簡単に見た感じを言うならば『真っ白な宇宙』
果てしなく真っ白で無重力

ただ一つだけあるのは黒い影

その影は言うならば犬
小さい（３０？位の）狩猟犬のような感じだ

その犬はこちらに歩いてきてこう言った

『お前にやってほしいことがある』

ーーーーー脳内会議ーーーーー

…なんだこの犬は

シルエットは狩猟犬のクセしてちっちゃくてかっ…可愛いじゃねぇか…

…つか、しゃべったよ！！何言ってんのこの子？

やってほしいことがある？

これ絶対フラグだろ！！

一緒に化け物を倒して！！とかそんなんじゃねぇの！？

…まぁまだわかんないよね

聞いてみなきゃ

そうまだわかんないよ

うん、勇気をだして聞いてみよう！！

ーーーーー（実際時間3秒）ーーーーー

「一応…話はきくだけきくよ」

『そうか、話が早くて助かる』

『まぁズバリ言うとこの私を世話してくれればいいんだ』

「…（。□。；）は？」

『今から現世へ戻る』

『そこでお前は高校生として暮らす』

『で、私はお前に世話してもらう』

『簡単だろ？』

「うん…それだけ？ホントにそれだけなのか？」

『何を想像してたが知らないがそれだけだ』
『よし少しおくれたが自己紹介をしよう』
『私は神に仕える者で修行のためお前のもとで暮らす』
『名前は勝手につけてくれてかまわん』

「じゃああんこもちね」

『…（どんなネーミングセンスなんだ？）』
『まぁいいや。私はラヴィでいい』
「えっ決めてあげｔ『お前の名前はそうだなぁ～』
『…藍木アイムで…』
「出席番号一番狙ｔ『両親いようがいまいがいいが…姉妹ありでのそいつらで萌えを狙うか』
「おまえ変ｔ『性別は男・女・自由に変身可どれがいい？』
「…（勝手に話進めやがって…）そんな魔法みたいなこと出来んの？」

『了解。自由な』

「あの勝手ｎ『自由の場合腹の中に珠が埋まる。つまりそいつで女にも男にも自由に変身できる』
『が、私の趣味で基本は女の子な』

「おまえやっぱ変たｉ『痛くはないが違和感はあるから』

「そもそもやるなんて言ってｎ『では、現実世界に行くぞ』

こうして私（俺？）の日常的非日常な高校生ライフははじまった

―『ハジマリ』ＥＮＤ―

『第二話　ーメザメー』

今は…朝だろう…

知らないはずだがなぜかしってるこの部屋…

私の、藍木アイムの部屋だ…どこにでもあるような女子の部屋

枕の横には『ラヴィ』（あんこもちがよかったのに）という名の私が世話を任された犬がスヤスヤ寝てる

とりあえず今日から学校へ行くのだろう

ラヴィが『学校には転校生として入れば問題ない』とかそう言ってたし…

この家はマンションの一室で横の各部屋には姉と妹がおそらくいる両親は世界を旅してる（ラヴィの勝手な設定で）とかなんとかでいない

「そういえばみんなの名前は…」

『おまえが今考えついたやつでいいんだ』

「おわっ！！！！！」

「起きてたのかよ！！しかも肩にのるな！！」

『起きてたの…しかも肩に…』

『おきの…もか…』
『姉がオキノで妹はモカな！！』
「だから勝手ｎ『早く支度しないと遅刻だぞ』
「マジ！？ヤバ！！」
急いで支度を…
あれ？…グラッ
めまいが…腹痛が…
もの凄くお腹が…痛い…
「ラヴィ…お腹が痛いよぉ…」
『仕方ないだろ？珠を腹ん中入れてんだし』
「どうにかならないの…？」
『そもそもその珠はお前と私の契約的なものだ』
『性別の変身なんてオプションだｗｗ』
「えっ！？じゃあ私騙さｒ『騙した訳ではない』
『そもそもお前は私の修行のため創られた存在』
『その珠は契約といっても絆の証程度のものだ』
「うっうぅぅ！！！」
スゥーーーッ

「何？何がおきたの？」

『当たり前だ。今はまだ変身機能は不安定…だが今ので完全版になっただろう…』

「えっ！？おわっ！！男に！！」

「学校とかで変身『しない』

「前も言ったけど人のはなｓｈ『遅刻するぞ』

「やべっ！！って学校の制服どこだ？どうすんだ？」

『大丈夫だ。服はお前の変身に合わせ適当な格好になる』

『学校では制服に平日は私服に』

『女の時は女の格好に男の時は男の格好に』

「そんなんもう魔法とか次元の違う話だろ！？」

『私が着せたいと思えば思った格好に』

「最後変！！お前やっぱ変ｔ『はい、服』

スゥーーーッ

なんと制服姿に…

「あのさ…『さぁ！！行くぞ！！学校へ！！』

「はいはい…まぁ男子の方が好みだし良しとするか…」

『あっ制服っつったら女子のミニスカだろ』
『それに学校では女子として入学するようにしたからな』

「えっ！？えっえっえっ！？」

スゥーーーッ

「ハァ…なんで女子でミニスカなんだよ…」

この先波瀾万丈な事が起こることはまだ先の話

ー『メザメ』ＥＮＤー

『第三話　ーテンコウセイー』

朝を告げるチャイムが鳴る

私は学校に来ていた

肩には３０？程の大きさの犬が乗っている

こいつは周りからは見えない

厨二病とかでよくあるような設定だろう

むしろそんなことが出来るとはさすが神の使者なだけはある…けど…

「ねぇ？修行のために現世に着たんでしょ？」

「ホントにこんな普通な生活でいいの？」

「山に篭もったり無人島生活したり…」

『…』

「ねぇ？聞いてる？」

『…ｚｚＺ』

「寝てらっしゃる（。□。；）！！」

『うるさい…お前ちなみにだが』

『端から見たら独り言を言ってる人だぞｗｗｗ』

「いっ今は大丈夫だもん！！」
「先生にここで待っててって言われたから誰もいないもん！！」
『そうか…ならいいか…今度は気を付けろよ』
『それとさっきの質問だが』
『試練を受け合格したら神界に戻るんだ』
「えっ！？そうなんだ！！」
『嬉しいのか？それとも寂しいか？』
「う～ん…まだわかんｎ『そう言えばお前の担任は若い女性の方か？』
「…うん多分そうらしいよ（｜＿｜＃）」
『話を中断されて怒ってんのか？いつもの事だろｗｗｗ』
「今回はそっちが話を振ったんｊ『担任来たぞ』
「へっ？あっ…」
？「あなたが藍木アイムさんね？」
？「私はあなたの担任の池森です」
藍「あっ初めまし『池ニャンキターーー／（＾∀＾）／ーーー』て
藍木アイムです」
『超美じｎグフッ（犬（∪（、Ａ，）…』

藍「よろしくお願いします」

池「よろしく。クラスだけど２ーEね」

ー２ーE教室ー

池「…ってことで今日からこのクラスメートの藍木アイムさん」

藍「よろしくお『女子が沢山おるやないかーーー／（＾∀＾）／ーー』願いします」

『カワイ娘ちゃんいっぱiグフッ（犬（〇（、A、）…』

池「席は窓側の一番後ろで神谷さんの隣ね」

藍「はい」

神「よろしくね」

藍「あっはいよろしく神谷さん」

神「いいよ神谷じゃなくて瞳で」

藍「よっよろしくね瞳さん」

神「さん付けじゃなくていいよ（笑）ね、アイム」

藍「うん、よろしく瞳」

『瞳ちゃんめっさカワイイじゃねぇか…』

『もう、この娘にお世話してもらいたい…じゅるり』

藍「…（ー＿ー＃）」

彼女、神谷瞳の正体なんて今わかるはずもない

ー『テンコウセイ』ＥＮＤー

『第四話　ーシレンー』

学校に来て2週間ちょっと経ち学校生活も慣れてきた

あれから瞳とも仲良くなり姉貴は同じ学校の3年生

妹は中3で近所の中学校にいっている

2人とも馴染んでるらしいがそもそも姉妹と会ったのも学校にきた

2週間前

2人は前から私のことを知ってるみたいだがこちらはこの世界自体

初めて

やはりなかなか違和感がある

そんな違和感が残るなか夕焼けが照らす道を瞳と下校していた

その下校中、道端に捨て犬がいた

神「あっ犬！カワイイ！」

大きさや見た目はラヴィと同じよう

だけどなんか変な感じがする…

『アイム…こいつ同じ臭いがする』

藍「へっ？」

その時

《ガルルルゥゥヴヴヴヴゥゥゥアオォォォォーーーーーーーーーーーーーーン》

ラヴィと同じサイズの犬から出てる音量

いや、生物からでる音量ではない

藍「！」「お腹が…いた…い」

お腹の珠が鳴き声と共鳴して激痛がはしる

《ガルルゥゥ》

その犬は瞳に噛みついていた

お腹の激痛で助けられない

ラヴィも同じように動けないでいる

神「ううあぁぁーーー」

噛みつかれている所からわかりやすく言うと黒いオーラが出ている

瞳も私もそのオーラに包まれていった

私はそこで気を失ってしまった

気が付くと周りは暗闇の宇宙のようだった

ラヴィと出会った所の闇ヴァージョンのような

藍「ってラヴィは？」

…肩でのんきに寝てやがる

周りには黒い雲が漂っている

その中の一つの雲に瞳が囚われていた

藍「瞳！！」

《待てそこの者》

《貴様はその犬の世話役か？》

藍「そうｄ『いや奴隷だｗｗｗ』ａけど」

藍「寝てたんじゃないの（｜｜＃）？」

「つか、奴隷じゃない」

『そうだったのかｗｗｗ？』

《まぁいい世話役だろうが奴隷だろうがかわりない》

藍「いや！！全然違ｕ《そんな貴様等に試練だ》

藍「お前も人の話は…って試練？」

《そうだ。何、簡単な試練だ》

《私を倒せばいい》

藍「えっ！？やっぱりそうなっちゃうの？」

『だってがんばって倒せｗｗｗ』

《まぁ楽にこの試練を通るもう一つの方法がある》

藍「えっ！？楽な方法あんの？」

「そっちにする！」

《ならこの人間を貴様の手で殺せ》

藍「えっ…」

《どうせ数日を共に過ごしただけだろう?》

《この試練どちらを選ぶか1日の猶予をやろう》

《明日のこの時間、逢魔ヶ時に貴様が通っている学校の屋上で待つ》

《それまでに決めるんだな》

そう言ってその犬は瞳を連れ闇の空間ごと消えた

―『シレン』ＥＮＤ―

『第五話　ーヘンシンー』

瞳が連れ去られた日の晩

瞳の両親からうちに電話がきて

「今日はうちの子が世話になるみたいだけどよろしくね」

との連絡がきた

瞳はうちに泊まっていることになっているらしい

『で、どうするんだ？』

『あの犬ッコロ倒すのか？』

『それとも瞳ちゃんを殺すのか？』

藍「…」

『まぁこれは試練なんだ』

『私も力を貸す』

藍「うん…ラヴィ…力を貸して」

「…ぶっ殺す」

『ぶっ殺す…のか』
『…だったら珠をもう少し理解して扱えるようになるのがいいんじゃないか？』
藍「珠の扱い方？」
『あぁ』
『前にも言ったが思った姿になれる』
『と、言ったな』
藍「うん」
『と言うことはだ』
『例えば銃を持った狙撃手の姿を思って変身すれば服装や装備がそれに変身する』
『だが、それなりにリスクもある』
『服装や装備もお前の一部だ』
『もし傷付くことがあれば何らかのダメージがお前に影響するだろう』
藍「ダメージの影響って？」
『わからない。このタイプの能力は個人差個人的な違いがあるからな』
『その場で自分にダメージがあるかもしれないし』
『後々じわじわ体を蝕むような痛みになるかもしれない』

『珍しいのは赤の他人へダメージがいったり全く影響がないっていうのもある』

藍「結局私はどうすｒ『まずはイメージトレーニングだな』

『お前がどういう姿でどのように戦いたいのか』

『それをイメージし私にテレパシーするつもりで念じろ』

『そうすれば姿は変わる』

藍「わかった。やってみる」

「～どうせなら可愛く魔法少女にでもなってやる～」

「～魔法少女…魔法少女…魔法…少女…魔法…少女…魔…法…少…女…～」

『よし…いくぞ…』

スゥーーーッ

「…あれ？何この格好？」

『まるで悪魔のような死神のような』

『神の使者の世話役とは思えない格好だな…』

私の格好というと
正に悪魔や死神という感じのボロそうな汚れたようなくすんだ黒い
大きなマントを羽織りフードも被って
なんと後ろには大きな鎖鎌
鎌の長さは１？はあるぐらい
刃は５０？はあるだろう
オマケに髑髏の首飾り付けちゃってるし
『まぁ中が中だし許してやるか』
「えっ！？中？」
「げぇっ！！マジ？」
マントの中はというと
下着じゃねえの！？ってぐらい布面積の少ない隠す所だけしか隠し
てない服
『もう、逝ける…』
「バッバカ！？こんなん恥ずかしすぎ（／／／□／／／）」
「もっと違う格好になるからもう一回変身」
『いや、それは無理だ』

『日常的な服装チェンジなら無限に出来るんだが』
『イメージして変身する戦闘モードは今の私たちでは一種類が限界だ』

藍「戦闘モード？」

『戦闘モードとは普通の服とは違い丈夫で防暑防寒防水防汚などの性能をもつもので神界で創られた特注品だ』

『現にそんな下着だけのみたいでも寒いどころか温かいくらいだろ？』

藍「うん」

『と、いうわけで終わり！！』
『にしてもその格好エロいよね。さすがアイムちゃん、ハイセンス』
『…アイムちゃ～んもうちょっとエロいポーズとって？』

「…」

「この鎌本物だよね」

『そうだ。あっあと敵の攻撃はそのマントで防げよ？』

「え？でも服装や装備のダメージは自分に影響あるんじゃないの？」

『もちろんあるが生身の体に当たったダメージよりマントでガードしたほうがダメージは物凄く小さくなる』
『生身で当たると死ぬような攻撃もそのマントならデコピンぐらいだろう』

藍「ふぅ～んこのマントスゴ『アイムちゃん足綺麗だよねぇ～グヘヘ』

藍「！！！！！（／／／A／／／）」

藍「バッバカヤロー！！変態！！駄犬！！見るなぁ！！！！！」

『嗚呼もっと踏んでぇ～キャインクゥ～ン』

藍「……キモッ……」

この変態キモ駄犬が明日大活躍するとは今はまだわからない

―『ヘンシン』ＥＮＤ―

『第六話　ーケットウー』

今日は休日だったためか午後４時過ぎだったせいか誰も学校にはいないみたいだが門は普通に開いていた（この学校の警備は大丈夫なのか？）

まぁ門も開いてるから玄関も開いていた

昨日の約束では逢魔ヶ時と言っていたがよくわからなかったから昨日、犬ッコロと会った時間位に屋上に来た

藍「まだあの犬ッコロ来てないね」

『全くこの私を待たせるとはいい度胸だ』

と、その時

周りが暗くなり黒い雲が漂い始めたかと思ったら目の前にあの犬ッコロと雲に囚われた瞳が現れた

《約束通り来たようだな》

《どちらにするか決めたのか？》

藍「もちろん」

《では、聞こう》

《この私を倒すのか》

《この女を殺すのか》

『そういえばアイムちゃん？ぶっ殺すって言ってたけど瞳ちゃんを殺すって意味なのか？あの犬ッコロを倒す意気込みなのか？』

藍「もちろん殺すよ」

「あの犬ッコロを」

藍「ラヴィ行くよ！！」

『いつでも』

藍「戦闘モード！！」

スゥーーーッ

昨日の晩最初の変身をした後・・・

他の種類への変身は不可能と言われたがヴァージョンアップなら可能と聞き特訓した結果

マントは微かに艶やかな光沢のある禍々しくも品のある上質なマントになり

中の服はもちろん布面積は増え（流石にあの布面積は少なかったので増やした）布の質もあがり上はタンクトップ下は短パンのようなものになった

鎌に関しては大きさはほぼ倍になった

にも関わらず

なんと藍色の焔を出しそれを纏った

その藍色の焔は重力を感じさせなくなった

何よりも凄いのは…

藍「いくよ」

《ほう…戦闘モードになれるとはな》

鎌の焔は自らの重さより軽くなるどころか

さらに私の重ささえも
無くした
《！！！》
重力と云う名の鎖から解かれた私の体は瞬く間も与えず犬ッコロを
間合いに入れた
もちろん私と同じく重力から解かれた鎌は光の速さで犬を貫いていた
《速いにも程があるだろ…グハッ》
『なんたって私の奴隷だからなｗｗｗ』

神「うっ…アイム…」
藍「瞳！！」
神？「よくやった…だが」
藍「えっ？」
「《マダオワリジャナイ！！！！！》」
「《ごめんアイム。コノ体ハ私ダケド、乗っ取られ…チャ…った…
うっ……》」
藍「瞳！？」

「《…キサマハコロス！！》」

『えっお前！！人間にとりつくのあり？』

『だったらアイムちゃん！！私もいくぞ！！』

藍「えっ！？何なにナニ？何するつもり？」

『憑依だ』

藍「えっナn『時間がない考えるな！！感じろ！！』

スゥーーーッ

藍「『うぅ…何なんだよぉ』」

ラ「『戦闘モードで犬耳に尻尾とかアイムちゃんエロすぎ…やっぱ逝ける…』」

藍「『ってうえええぇ！！？犬の耳と尻尾生えてるし！！げぇ！！珠も露出してるけど！！大丈夫なの？』」

ラ「『大丈夫。それよりあっちに集中したほうがいいんじゃないの？最大級の攻撃しようとしてるぜ？相殺したらあっちの憑依も解除できんじゃねぇの？』」

藍「『本当？』」

ラ「『こんな時に嘘言う隙なんてないよ。それに女子とエロい娘に嘘は言わないよ』」

藍「『ありがと…ってやっぱ最後変態発言！！って言ってられないか…ラヴィ…いくよ』」

ラ「『いつでも…っていっても鎌で撃ち返すしかないけどｗｗ』」

「《イクゾォォ！！シネェェェ！！！！！》」

奴は周りの雲を一つにまとめ圧縮した禍々しい闇の球を撃ってきた

藍「『ホームランブチかましたるぅ！！』」

ラ「『おうよ！！』」

大きさからして撃ち返せないほど大きい闇の塊

しかしそのなかから瞳を感じた

助けて、と

藍色の焔が壁となりその闇の塊を受け止めた

藍木&ラヴィ「『イッケエエエェェェェーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！』」

気が付いたら夕陽が沈んだ学校の屋上にいた

藍「どう…なったの？」

『私達の勝ちだ』

そういったラヴィの足下にはあの犬が横たわっていた

その犬はムクリと起き上がりこういった

《貴様の勝ちだ…試練はこれで終わりだ》

藍「えっ！？じゃあもう神界に戻るの！？」

『何を言ってるんだ？』

『初めの初めの試練が終わっただけでまだまだ修行は始まったばかりだぞ？』

藍「（。□。；）…えええぇぇーーーーー」

神「う…うぅ…アイム？」

藍「あ…瞳！」

『良かったじゃん？これからも瞳ちゃんと一緒にいれるから』

藍「まぁね…これからもよろしくね瞳！！」

神「えっ！？何なのも～ぅ（笑）」

―『ケットウ』ＥＮＤ―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4562ba/

腹痛少女と犬

2012年1月12日13時48分発行